

フィリップ・クロデ

絵本工房「Les Doigts Qui Rêvent (夢見る指先)」
創設者

今日は皆さんと、目が見えないということがどう
いうことなのか一緒に考えていきたいと思います。

まず、2つの絵をご紹介します。1つは、ポーラ
ンド人の学生が描いた絵です。もう1つの絵はブラジ
ルの女学生が書いた絵です [fig. 1]。絵というもの
は、まるでトラックのように現実を運んでいるので
すが、その運んでいるものの形はさまざまです。この
絵は、視覚障害がある2人の学生が描いたもので、触
覚で認識したものを描いています。講演の最後に、何
を描いたものか種明かしをします。

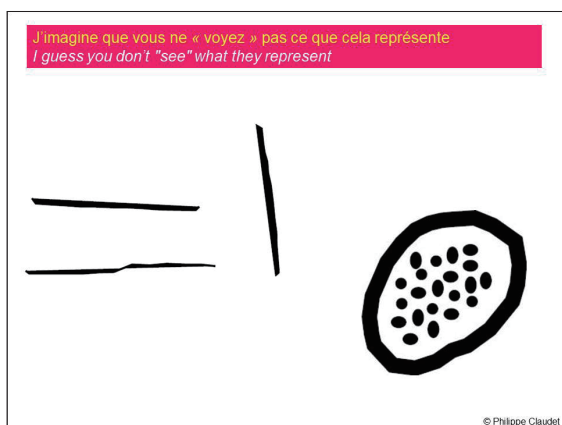


fig. 1 左がポーランド人の学生、右がブラジルの学生
が描いた絵 (レクチャースライドより)

触察本の歴史

「夢見る指先」はパリから南東に300キロ離れたディ
ジョンというところにありますが、私たちの話の前
に、触察本に関する歴史をおさらいしておきましょう。
1784年に世界で初めてフランスに盲学校が設置され
ました。1829年にはフランス人のルイ・ブライユが
点字を開発します。この時、視覚障害がある子ども
のための触察本は存在しませんでした。

1860年から1914年にかけて、世界中で盲学校がた
くさん設立されましたが、凹凸のある地図を除いて、
子ども達はほとんど触図に触れる機会は得られませ
んでした。1975年、フランスにおいて法律ができ、視

覚障害がある子ども達すべてが教育を受ける権利を得
ました。1990年代になると先進諸国で、普通学級に
視覚障害のある子どもたちが入学するようになりました。
しかし、晴眼者のために作られた教科書はある
のに、視覚障害がある子ども達にはいっさい本が与
えられていませんでした。唯一、彼らが持っていた
本というのは、保護者や両親が手作りした本でした。
2005年、視覚障害がある子ども達が普通学級に入学
する法律が認可されましたが、やはり触察本はあま
り出版されることはありませんでした。現在も、本
の飢餓状態が続いています。

「夢見る指先」の歴史・理念

すべてが始まったのは、1992年から1993年にか
けてです。当時、教員をしていた私のクラスに視覚
障害がある子が入ってきました。そこではじめて触
察本をつくりました。1994年には非営利団体として
「夢見る指先」を設立し、翌年、触察本の状況を知る
ためにイギリス、ベルギー、イタリア、スペインを
視察しました。触察本があまり作られていないと知っ
たので、1996年に自ら工房を開設しました。

1999年には触察本に関する第一回シンポジウム (国
際会議) を開催しました。参加したのは、触察本を
作りたいけど作っていないという方々でした。工房
を持って触察本を作っているのは本当に私だけで
した。2000年に国際的な企画として、すぐれた触察本
に与える賞を設けました。同じ頃、私は教育省から
任命を受けて「夢見る指先」の専属教員になること
ができ、フルタイムで触察本をつくることに従事で
きるようになりました。活動を進める中で研究員の
協力が必要だと痛感したので、2002年には大学の研
究者の協力を得て、触察本に関する共同研究を始め
ました。

「夢見る指先」の理念をご紹介します。触察本の作
り手は、就職が困難な状況にあり社会参加が難しい
人々です。例えば、長い間失業していたり、アルコー
ル依存症であったり、精神的に問題を抱えている人
たちです。彼らは触察本の制作によって、社会参加
や就職をすることができ、読書や文化へのアクセス
が困難な状況にある子ども達に触察本を提供するこ

とができる。すなわち、弱き者の力になることで豊かさを見出すということが、私たちの活動の基本になっています。私たちにとって、読書と文化へのアクセスは権利です。

社会の責任についても、少しお話したいと思います。視覚障害がある人が読める本が存在しない、すなわち社会が視覚障害者に本を提供することが無ければ、それはハンディキャップを生むことになります。身体的な障害を生まれて持っているのは個人ですが、ハンディキャップは社会が作ってしまうものなのです。

「夢見る指先」の活動

私たちは次のような活動を行っています。ざっと並べてから、いくつかの活動を詳しく説明します。

- ・ 触察本をはじめとする本の出版
- ・ 参加型デザイン
- ・ 国内外の本の見本市への出展
- ・ 晴眼者の児童を対象としたワークショップの開催
- ・ 国内外での講演会
- ・ 国際的プロジェクト
- ・ 大学などとの共同研究

触察本をはじめとする本の出版、参加型デザイン

私たちが作っている本は、未就学の幼い子どもたちのものから始まります。ページの少ない小さな本です。教育者や保護者に向けた本も作っています。普通学級で教鞭をとる教員に向けて、目が見えない、目が不自由であるということがどういうことか理解し、より良い支援をするための本です。

少年少女向けの文学書も作っています。イラスト入りの触察本です。また、国内外のアーティストによる触察本も出版しています [fig. 2]。きっかけは、美術館に行っても視覚障害がある子どもが触れて鑑賞する作品がほとんどないことに気がついたからです。この触察本を通して、視覚障害者もアートに触れることができます。

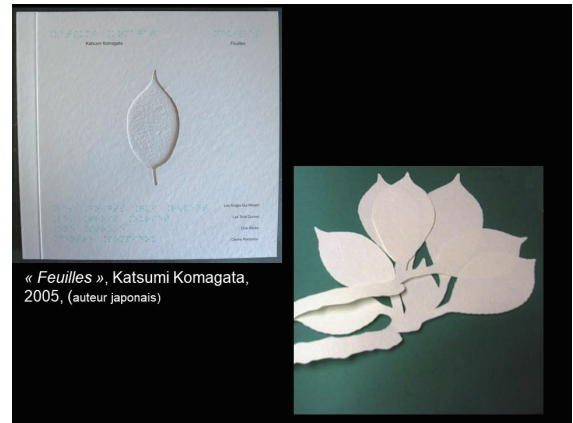


fig. 2 《Feuilles》, Katsumi Komagata, 2005 (レクチャーライドより)

比較的新しい、あまり一般的でない制作方法にも取り組んでいます。触察本をつくる際、多くの場合は、晴眼者がこれは視覚障害がある人たちに良いだろうと思うものをつくる、そのあとに実際に試してもらいます。私たちのプロセスは異なります。私たちが考えたのは、触察本を考案する、デザインする段階から視覚障害がある子ども達に参加してもらう方法です。これは私一人で思いついたわけではありません。

ある日、私は小さな盲学校を訪問しました。そこで目にしたのは、6～7人の子ども達が、身の回りにある日用品を利用して絵にするという工作をしているところでした。「天才だ」と思いました。この子どもたちはデザイナーやコンセプターとして、触察本作りに参加してもらうべきだと思いついたのです。最近では、これを参加型デザインと呼ぶようですが、当初は知りませんでした。

視覚障害がある子どもたちのための仕事をしている大人、保護者のための本もつくります。これらは翻訳本が多いです。視覚障害者のニーズに応えるために積極的に行動している人は各国にいますが、限定されています。しかし、数が少なくても、世界的に優れた方が出版している本を寄せ集めて翻訳すれば、かなり多くの冊数になります。これまで45冊の本を出版しました。これは、全世界にいる翻訳ボランティアによって可能になっています。『Terra Haptica』という小冊子も出しています。年に1冊、約70ページ程度のものですが、科学的な分野の読書会でも進められています。

いくつかの数字をご紹介します。「指見る指先」にはフルタイム従業員が3名、パートタイムが10名、政府からの助成金を受けて働いているスタッフが4名います。加えて、制作に携わっているボランティアが30名います。オフィスは300㎡の面積がありますが、決して大きなオフィスではありません。

1994年の創設から今日までの出版物すべてを合算すると、累計で343タイトル、38,800冊になります。加えて、ベルギー、チェコ共和国、フィンランド、ドイツ、イタリア、ポーランド、ポルトガル、イギリス、アメリカなどへ13,200冊を輸出しました。合計の累計部数は52,000部です。この分野では膨大な数字です。

私たちの作った本を、誰が買っているのでしょうか？フランスですと、公立の図書館はすべて、障害がある子どもたちのための本を蔵書する義務があります。私たちの作った本の16%が公共図書館に配架されています。公立の学校に配布される本が7%、保護者が1%。コレクターが10%です。保護者1%は少ないと思うかもしれませんが、例えば両親から「こういう本が買いたい」という電話があったときは、図書館へ行って借りなさいとお伝えしています。図書館にない場合は、図書館に買うように言って注文書を出してくださいと伝えます。フランス国内と国外向けですと、全体の34%が国内へ、残りの66%が輸出されています。

一冊の本を作るために、コンセプト作りや準備に最低12か月かかります。それから一冊を手作りで仕上げるのに2時間から4時間が必要です。人件費が本のコストの85%を占めます。本が完成したら、次に行く活動はフランス国内外の見本市への参加です。視覚障害がある子どもたちの親でさえ、触察本の存在を知らない方々がほとんどだからです。

晴眼者の児童を対象としたワークショップの開催

とても重要な活動として、晴眼者の子ども達に向けたワークショップがあります。晴眼者である自分と、目が不自由な子ども達の間にあるのは「違い」であって、「優劣」とは全く関係ないものだとしっかり認識してもらうためのものです。基本的にはフランスに限られますが、ときどきベルギーとイタリアで

開催しています。2003年以降700回開催し、子ども、保護者、教員含めて合計45,000人が参加しました。

国内外での講演会、国際的プロジェクト、大学などの共同研究

講演会は、これまで36か国で講演をしました。フランスでは76回講演をしています。国際プロジェクトとして、2000年から国際的なコンクール「typhlo & tactus」を開催しています。もっとも優れた触察本に賞を与えて実際に製品化するという企画です。最初は東ヨーロッパの3か国からはじまり、2008年には欧州を超えて16か国からの参加がありました。累計で800の応募がありました。2000年から2008年の間は、フランス教育省の助成金で触察本を作ることができたので、欧州全土で日本円にして2000円という廉価で販売できました。コストは2万円です。合計7,689冊の受賞作品が流通しましたが、これらは触察本の名刺のような役割を果たし、普及に役立ちました。

もう一つ、欧州において協働で行ったプロジェクトがあります。課題として、3歳から5歳くらいの幼い子どもたちのための本が本当に不足していました。この年齢層は、親が子どもの障害を目の当たりにする時期でもあり、離婚に至ったりするような最も難しい時期と言われています。制作にあたり、欧州で行われている未就学児童のための自宅相談員制度を活用しました。優れた5名の相談員の協力を仰ぎ、こういうニーズがあるのかを尋ね、クロッキーを描いてもらいました。それを元に私たちが本のプロトタイプを作り、フランスとイタリアの大学の協力を得て、さまざまなテストをしました。イタリア語とフランス語で発行しましたが、プロジェクト立ち上げから完成まで5年かかりました。国際的な計画を進行させ運営するのは、かなりの労力と時間を要しますが、成果は本当に素晴らしいです。

進行中のプロジェクト

最新の研究で、特に先進国の視覚障害児の70%が、大脳皮質の視覚領に障害が出ることで目が不自由になることがわかりました。目は正常に機能していて

も、目に入ってきた信号が脳で分析されないので、ものを視覚的に捉えることが出来ないという現象です。例えば、未熟児への蘇生措置として酸素吸入をした際に、脳が損傷してしまうことに起因するとされています。

私が教員だった頃、視覚障害は一括りで考えられていました。今では、脳皮質に由来する重度の弱視のケースが大変多い。弱視の場合は、ただ見えないということではなくて、さまざまな症状があります。本はいったん印刷してしまうと変更はできません。本をどのように子どもに適応させていくか私たちは考えなければいけません。このテーマで始めた活動には、7か国の方々に参加してもらっています。一人一人の症状に合わせてタブレットの設定を調整し、触察本と併用するというコンセプトですが、まだ研究を始めたばかりなので完成まで時間がかかりそうです。

大まかな制作の流れとして、最初に数々の疑問を大学の研究者などに投げかけることから始まる場合があります。その研究成果を反映したものを作ることによって時間的な効率を高め、よりニーズに適応した本を作るようにしています。また、いまフランスで研究員や公募スタッフと共同で研究開発を進めているものは、教員や保護者から送られてきた「こういう本を作りたい」というサンプルから始まりました。現場のニーズを知った後は、テーマに応じてスペシャリスト集団を形成します。そうして研究を始めるわけですが、デザインに8か月、実際の作成に8か月かかります。

理想と現実

全てが理想的に進んでいるように聞こえたかもしれませんが、さまざまな困難にも直面します。まず倫理的な問題があります。国連、ユネスコ、ユニセフなどで人権や子どもの権利に関するさまざまな大宣言が行われているにも関わらず、障害を持つ人々の状況は一切変わっていません。

資金面の問題もあります。政府も資本主義者もマジョリティである晴眼者にしか興味がなく、マイノリティである視覚障害の子ども達にはあまり興味を

示しません。子ども達には文化や読書にアクセスする権利があるにもかかわらず、大成功している資本主義者やプライベートカンパニーのもとへ物乞いに行かなければいけない状況です。それから、作り手は社会参加が難しい人々だとお話ししました。美しい触察本の制作を、職業資格がない、本を作った経験のない人たちに依頼しているわけです。これもチャレンジです。しかし、忍耐と共感の心を忘れなければ、きちんと正確なものができます。

進め方の難しさもあります。私たちはつねに選択を迫られています。晴眼者の立場から、凹凸をつけただけの本を良しとして提供するのか、あるいは、視覚障害者が本当に必要としている本をデザインから参加してもらいながら作っていくかというような選択です。

子どもたちはどうやって触図を見るのか

触察本を読んでいる子どもの指先をお見せします。ページに触れると、指のお腹につけたカメラが作動します。子どもが触れて得る情報と同じだけの情報を、皆さんには視覚的に確認してもらいます [fig. 3]。

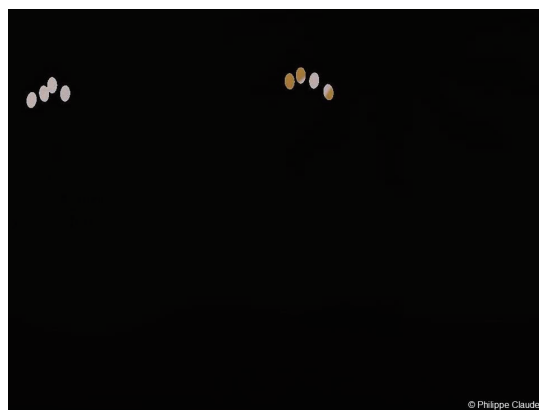


fig. 3 視覚障害がある子どもが、触察本を読むときの指先 (レクチャーライドより)

子どもは、ページに触れるたびにテクスチャーに触れます。テクスチャーにはかたちがあります。かたちには大きさがあります。そして、ページのどこかに配置されています。かたちには方向性もあります。例えば、木の絵だったら縦、ワニの絵だったら横という風に。それから、ページに配置された要素には相互に関係性があります。5歳か6歳の子どもが指先で1カ所何かに触れるたびに、この6つの情報

が一度に入ってくるわけです。

晴眼者の場合は、統合された一枚の絵が瞬時に目に入ってきます。対して、視覚障害者は部分的にしか触れられないのです。いきなり理解できるものではなく、1カ所1カ所部分的に触れながら、頭の中で分析して統合するというステップが必要です。

晴れた日、私たちはビルの屋上から富士山を見ることができます。でも触覚で見るとするには、自分の体と対象物に接点が必要です。視覚で見るとするには、一定の距離が必要ですが、触覚で見るとは触れていないと見えないのです。

視覚障害がある子どもが絵を読み解くとき、晴眼者の子どもと同じように解釈に基づいた分析をします。体験の領域は限定されてしまいますが、経験則を持っています。嗅いだ匂い、耳で聞いたこと、触れたことなどが世界を判断する指標になります。本の中でも、自分が体験して、知識として持っているものを探します。小さな子どもが、たくさんの指標を一つにまとめるための分析をして、指標すべてが一つになったときに、はじめてその絵が何であるかを識別できます。さきほどの子どもの指先は、ページに272回触れていました。触れるたびに6つの情報が入ってくるので、すなわち $272 \times 6 = 1632$ の情報が入ってくるわけです。

例を挙げましょう。古い触察本からとってきた象の絵です [fig. 4]。皆さんはすぐ象だと分かりますが、視覚障害がある子どもの状況は全く異なります。象の本物はおろか、象の絵に触れる機会はほとんどありません。



fig. 4 古い触察本にあった象の触図 (レクチャースライドより)

ただ、保護者や教員から特徴を聞いた可能性はありますね。すごく大きくて、背も高くて、4本の足、牙が2本、長い鼻が一本、しっぽが一本、大きな目が二つ、耳が二つだよ、と。子どもは象について知っている知識を紐解きながら、象を探して絵に触れます。ただ、横向きの絵だと足は4本、しっぽは1本。でも、牙は1つ、目も一つ、耳も一つ。晴眼者の場合は、本物と絵の間に視覚的類似性を見出し、全く同じではないけど似ていると判断することができますが、視覚障害がある子どもの場合は、話に聞いた象と違うので象ではないと判断します。

木の触図を例にしましょう [fig. 5]。目の不自由な子どもが知識として知っている木は、外で触れたことのある幹の部分です。背の高い木の葉や枝には実際に触れることができないので、木として認識していません。この絵は凹凸をつけて木全体を表していますが、これは晴眼者が見た晴眼者のための木です。なぜなら、目が見えない子どもの木の体験と合致しないからです。すなわち、触覚的類似性はこの木に見出せないわけです。

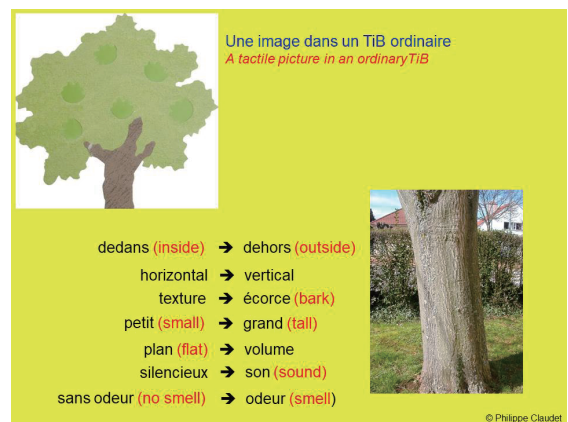


fig. 5 古い触察本にあった木の触図と実際の木の比較 (レクチャースライドより)

触図の作り方と問題点

靴下を例に、触図をどう作るか考えてみましょう。まず、靴下を絵に貼ることが思い浮かびます。しかし、子どもは靴下を丸めたり、指を入れたり、引っ張ったりして遊んだことがあるので、子どもにとっての靴下はさまざまに変化するおもちゃとしての靴下です。かたちがさまざまに変化することを可塑性と言いますが、ページに貼った靴下は、テクスチャーが

残るものの可塑性は失われてしまいます。

普及している方法として、熱形成があります。プラスチック製の紙を型に押し付けることで、紙に型通りの凹凸がつくというものです。しかし、子どもが引く張ることもできなければ、素材感ありません。子どもが体験して認識している靴下の概念をプラスチック製の靴下に見出すことはできませんね。

輪郭を膨らませる方法もあります。紙の上に発泡性の膨らむインクで描くのですが、靴下の素材感はありません。可塑性も無く、加えて、靴下の内部に触れた時と、輪郭の外に触れたときの違いがわからないんですね。そのため、子どもがこれは靴下なのか、背景なのか判断することができません。晴眼者が視覚的に確認して、これで視覚障害者のニーズに合致するだろうと思いついていても、実際のニーズに応えられていないのです。

絵のルールと歴史

1800年代のアマゾンの探検家が、自分の写真を原住民に見せたけれど、原住民は目の前に立っている探検家を写したものだと分からなかったという話があります。両者の間に類似性を見出すことができなかったのです。見ることは、生まれつきの能力でなく、生存とともに学習するものです。紀元1000年に描かれた王様と城の絵では、王の方が城より大きく表現されています。当時は、人物の大きさに社会的な地位を表現するという方法がありました。当時の絵の見方と、今日の絵の見方は異なるわけですね。

絵を描くということも、後天的に学ぶものです。亀を描く時には、おそらく横から見て、目が一つあって足が2本という姿を描くと思います。亀の描き方の約束事が暗黙の了解としてあるからです。先史時代から洞窟の壁画を描いていた私たちが、何千年もの時をかけて作り上げてきた約束事に基づいています。それに対して、視覚障害者は触覚で描く絵の約束事を歴史的に作っていません。

視覚障害者と晴眼者とは、世界観や世界の見方が変わってきます。視覚障害がある子どものセリフを紹介しましょう。「どうしてみんなトムはおじいちゃんそっくりだっていうの?」「トムは柔らかくてほか

ほかと温かいのに、おじいちゃんはチクチクして固いよ」。もう1つ、子どものセリフです。「どうやったらあんな大きな木が、こんな小さな窓から見えるの?」。晴眼者の遠近法の概念は、目が見えないとわからないのです。

優劣ではなく、すばらしい「違い」

さあ、最初にお見せした絵が何を描いているのか、分かった人はいますか?

答えは「バス」です。晴眼者は距離をとってバスの全体像を見ますが、視覚障害がある学生は自分が触れる範囲のバスを描いているわけです。ステップが2段あって、手は縦のバーに触れる。それを平行な2本線と縦の1本線で表現しています。

もう一枚は「川」の絵です。川に入って腰あたりまでつかると水面を腰まわりに感じます。そして、足の裏には小石があたります。触図で描かれた絵というのは物体と接触している、あるいは中に入り込んでいるものです。晴眼者と視覚障害者とは、現実との関わり方に違いがあります。この違いはいけないことですか?間違っていますか?

晴眼者が描くような絵でないから間違っていると言えませんよね。私がこの絵をはじめて見たとき、私が見えない世界を見ている、全く違う世界を表現していることに感動しました。なんて素晴らしいんだろうと思ったのです。以上です。ありがとうございました。

2019年8月4日(日) 横須賀美術館

2019年8月7日(水) 世田谷美術館